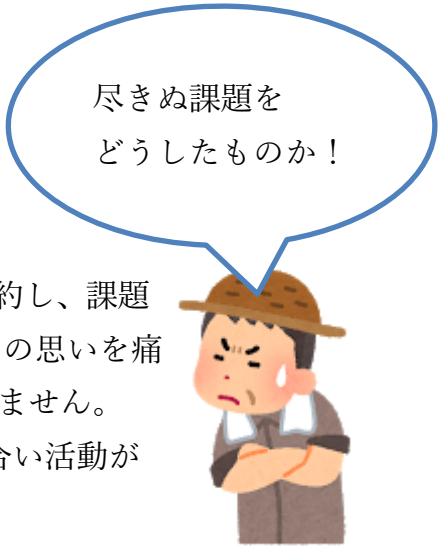


## 見つけよう、あなたの集落の魅力！

前月号では京都府内の集落営農の現状について触れましたが、「進む高齢化。後継者や担い手がない。農地が守れない。5年後には集落の存続が見えない」等、今現在進行中の集落の現実です。多くの農村・集落が、将来に不安とさまざまな課題を抱えているのは、周知の事実です。

集落の将来を見据え、農地中間管理事業を活用して農地を集積・集約し、課題解決に向け懸命に取り組む集落がある一方、「なんとかしなければ」との思いを痛感しつつも、何から手をつけたら良いか困惑状態の集落も少なくありません。

そこで、「なんとかしなければ」の思いがあれば、始められる話し合い活動があります。そのポイントと事例をご紹介します。



尽きぬ課題を  
どうしたものか！

### □「なんとかしなければ」からはじめる「話し合いの輪」

「地域の話し合い」と聞くと、ちょっと固い雰囲気になったり、何をどうしたら良いのかと感じていませんか。リーダーを誰にするか、事前準備に何が必要か、そもそも地域の方が集まってくれるのだろうか、考えを巡らせるだけの状況で、なかなか前に進めないままの日々が続いているところもあると思います。

「地域の話し合い」にも、色々な進め方があっていいと思いませんか？

地域の寄り合いの延長線上に位置付けた、容易な「地域の話し合い」の場作りがあります。

### □より簡単な「地域の話し合い」の場作り

今回ご紹介するのは、容易な「地域の話し合い」の場を作る一例です。

**地域のリーダーがいなくても、誰もができる、地域の住民をその気にさせる、「地域の話し合い」活動です。**

これは、みんなで**地域の課題（今地域にないモノ・ないコト）**を探り出し、課題解決の材料として今の地域に**あるモノ・あるコト**も探し、それをベースにアイデアを出していくというものです。しかも、出たアイデアをまとめる必要はありません。

### □「まとめない」アイデアは、掛け合わせて拡げていく

話し合いで出たアイデアは、「まとめる」のではなく、様々な方法で**組み合わせ**、優先順位をつけ、**順位の高いものから実行に挑みます**。あえて「まとめない」ことで自分たちの**想像を超えるような「組み合わせ」**ができるかもしれません。

## □ほんの一例ですが…

和歌山県田辺市龍神村では、高齢化、人口減少が進む中「龍神村をなくしたくない」という住民の強い思いから、真剣な話し合いがスタートしました。

話し合いを始めるにあたっては行政から国の事業の活用が提案され、地域と行政の話し合い活動を研究している東京の先生の指導のもと行いました。（これが裏面で説明した手法です。）

また、話し合い活動の母体として、団体「みらい龍神」を立ち上げ、龍神村の小中学校の教員・校長を務め定年退職された富田進氏に代表をお願いしたとのこと。

それを踏まえて、話し合いはどのように推移したのかを見てみましょう。

村存続がかかった鬼気迫る大命題に、村が広いこともあり、3地区に分けての話し合い開催が提案されましたが、多くの住民から「龍神村として取り組みたい」との意見が噴出し、村全体での話し合いになりました。ここから「龍神村」ブランドの構築がビジョンに掲げられました。

まずは地域再生の鍵を握る、地域にあるモノ・コトからの探索開始です。この地域の資源として、里芋（あるモノ）を栽培しており、煮て食べるとおいしい（あるコト）。これを起点に、里芋で焼酎を作ってみてはどうかという運びになりました。

里芋焼酎造りを進めていくにあたっては、長野県の酒造メーカーがこちらの思いを理解と協力をしてくださり、製造をお願いすることにしました。材料の里芋を村で下処理してトラックで長野まで運んだということです。

商品ができあがる課程で、商品ロゴにも自然と話が拡がり、稲の色で温泉マークを描き出し、これがアートづくりに発展。これらが新しい価値の創造へとつながっています。



※商品化された無農薬里芋焼酎



※Iターンした住民が考案した焼酎のロゴ

この取り組みは、地元住民とU・Iターン者、高校生も大きな戦力となり、平成21年には20戸の参加だったものが、平成26年には、126戸が参加する取り組みに拡大しています。

村の存亡に直面した住民・集落が、話し合いを通じてアデアの山を築き、合意形成を図りながら、村の特産ブランド品を作り上げることを実現したのです。

富田さんは「話し合いが継続しているのは地元が諦めず地道に取り組んでいるから。ネットにはすばらしい取り組みのように書いていただいているが楽ではなかった。話し合いの中で学んだことは、（和歌山弁でいうところの）アホになって進められる人が3人いれば成し遂げられる、ということ」と語ります。

今は、新たに村の芸術家の力を借りて、観光資源として「たんぼアート」に取り組んでいて、まもなく見頃をむかえるとのこと。

話し合いに決まった形はありません。集落各々に相応しいやり方があると思います。そんなところから考えてみるのも「話し合いの場」作りの第一歩になるのではないのでしょうか。

取材：「みらい龍神」代表 富田進 様      取材協力：龍神行政局 様  
ご協力ありがとうございました。